

北方（エトロフ）

飛行機のない飛行場

—エトロフ島—

鹿児島県 倉野 正夫

私は鹿児島県の国立公園で有名な霧島山麓の老松町の農家に生まれ、八人兄弟の四番目で成長しました。昭和十七（一九四二）年九月、徴兵検査を受け、第一乙種合格となりましたが、甲種合格にならなかったことが残念でなりませんでした。

それより前の昭和十六年十二月八日、大東亜戦争が始まり、当時連戦連勝のニュースが毎日報告され、日本男子として御国のためにご奉公せねばと心に燃えておりましただけに、第一乙種合格は

残念でした。先輩から心配するな第一乙種合格も甲種合格と同じで、遅かれ早かれ兵隊さんだよと励まされホッと致しました。

私は国鉄の機関士に奉職し、宮崎駅から人吉駅間の機関車の運転を致しておりましたので、連日どこかの駅からか出征兵士を送る姿を見て、血湧き肉踊るの感いっぱいでした。

甲種合格になった若者は、早い人で新年の一月には入隊で、その勇ましい姿を見て何故か私は取り残された感じでした。それでも一抹の不安はありませんでした。生めよ増やせの国策に協力して、八人もの子宝をもった父母はどうして生活して行くだろうか。私の給料が入らなくなればと、生活上の心配があったからです。

昭和十八年になりますと、南方方面での戦況は少しづつ厳しくなってきました。ガダルカナル島からの撤退開始、アッツ島部隊の玉砕と悲しい情報をお国のお役に立ちたい気持ちでした。

機関車の運転士でしたから、私の兵科は航空兵の整備兵として、九月十日の入営命令を頂きました。その時の喜びは唯々嬉しさいっぱいでした。父も母も「おめでとう」と言ってはくれましたが何か淋しそうでした。働き手の私の収入がなくなることと、兵隊に征けば二度と帰っては来ないであろうと、思う不安からでありましょう。当時は出征兵士を送ることが世間様に対し肩身の広い時代でしたから、愚痴一つ言えない両親の気持ちはよく解りました。

狭い町でも妻子のある働き手に召集令状の赤紙が来て、次々と万歳で送られて行く姿を見ながら、女々しい涙を流してはならないと我慢する母の姿には、頭の下がる思いでした。四月になって、海

軍の連合艦隊司令官山本五十六大將が戦死されたことは国民に大きな衝撃を与えました。五月にはアッツ島の山崎部隊の玉砕の報も残念なことでした。

私の勤務する国鉄も、若い人々が戦争に召されるので、人手不足の時代になりました。全職場で夜昼なく一生懸命みんながんばりました。九月十日の入隊の日まではがんばるぞの思いでした。

慌ただしい毎日の中で一年はあつと言う間もなく過ぎ、昭和十八年九月十日、家族や近所の町の方々の万歳の声に送られて吉松駅を出発しました。気丈な母は涙一つ出さず「元氣でお国の為になんばれよ」と励ましてくれました。万歳の小旗の波の中に、両親の顔も見えました。

国のため 尽くせよと送る 母の顔

涙出さずに 心で泣いて

このような気持ちであろうと思いました。そして兄弟達に「お父さんお母さんを頼むぞ」と叫び、

じいっと涙をこらえるのが精いっぱいでした。

毎日機関車を運転して通った吉都線のレール、再びこのレールを通過して家に帰ることができたらどうか……、いやいや女々しいことは言うまい、きつとお国のために命を捧げるぞ、俺は九州男児、薩摩健児だぞと胸に刻み、新田原の西部第一〇一部隊の営門をくぐりました。

私は第八中隊に配属されました。中隊長は森山中尉殿で、私の班は第二班で班長は原軍曹殿でした。説明を聞いて分かりましたのは、この部隊には第一中隊から第八中隊まであり、歩兵、自動車そして私の属する航空班と分かれて訓練されるということです。歩兵が三個中隊、自動車隊が三個中隊、航空隊が二個中隊あり、入隊者が多かった理由が分かりました。

入隊翌日から厳しい訓練が始まりました。九州男子の多い部隊だけに、気合が入り大きな声で叱り、叩かれるビンタの音、内務班での軍人勅諭の

暗誦、訓練は九七式重爆撃機の巨大な整備訓練、話には聞いておりましたが、教育の厳しさは大変でした。敏速な行動、大きな声での発声と返答。男の世界の厳しさについて行くのに一生懸命でした。

日曜日に面会に来た母は、私の手のひび割れを見て「こんなに手が荒れて」とやさしく撫でてくれました。「皆同じだよ」と答えました。自分の家では何一つ水仕事をさせられたことがなかっただけに、びっくりした顔でした。持参してくれた餅は、毎日腹をすかしている私には何よりも嬉しい贈り物でした。ここで食べると分けてやらねばならないので、私はお礼を言つてそつと食べるそのおいしさ、食べながら母の温かい親心に感謝しました。

毎日叱られ叩かれ三カ月の教育訓練はあつと言う間に過ぎました。十二月中旬になって私達初年兵は、それぞれ配属部隊に向け三々五々出発しました。私達二人は北海道の帯広航空隊に転属を命

ぜられ、後藤軍曹に引率されて出発しました。日豊線から山陽線、東海道線を、今度は軍服を着た兵隊として列車に乗っての長旅でした。乗客の皆さん方が軍服を着ている私達に「苦勞さまで、す」と声をかけて下さる度に「はい」と立って挙手の礼をするのが忙しく、居眠りする暇もありませんでした。

東京駅で約六時間位自由時間があるからと、宮城前広場と靖国神社に案内して下さいました。宮城前の広場に立って二重橋の奥を眺め、この奥には天皇陛下がお在します。毎日の戦争をどんなに心配されておいでであろうか：「天皇陛下、私も御国のためにがんばります」と心の中で叫びました。靖国神社の大鳥居をくぐり、社前に進みますと自ずから頭が下がりました。幾多の戦争で、お国のために名誉の戦死をなさいました先輩の皆様をお祀りしてある靖国神社だと思いと、自然に頭が下がりました。先輩の皆様お待ち下さい。この私もお国のために命を捧げます、と誓わずに

はおれない思いが湧き上がって来て、思わず知らず手を合わせておりました。大変意義のある場所を見学させて頂き、感激を胸にして東京駅より北海道へと列車は走りました。

北へ進むにつれ雪が多く見られ、青森駅に着くと外は真っ白でした。南国九州で育った私には、霧島連山の頂きに積る雪は見ましても、低地に積もっている白雪は珍しい風景でした。青森駅から青函連絡船に乗り、函館駅に着きますとびっくりするような雪でした。

列車は一面銀世界の広々とした平野を、帯広目指して走りました。「北海道って広いなあ」と思わず叫びました。この広々とした北海道が私の勤務地だ、どんな仕事が待っているのかなあと胸をはずませ、帯広駅にて下車しました。

帯広駅では部隊からの迎への車に乗せて頂き、北方第一三六部隊航空大隊に到着しました。広い広い飛行場も一面銀世界でした。立派な兵舎は暖

房され温かでしたが、一步外へ出ますと頬に痛みを感じずような寒さでした。

翌日から早速兵舎内外での訓練が始まりました。手の悴かじかむような寒さの中で、実戦用の飛行機の説明を聴き、整備点検作業にかかりました。ほとんど格納庫の中で行われました。それでも実戦用の飛行機の数は多くありませんでした。聴きますとほとんど南方戦線に行き、この地区には多く残ってはいないとのことでした。

初年兵の私には、古年兵のお世話等細々とした仕事があつて多忙でした。一番大きな仕事は冬將軍との戦いでした。南国育ちの私には、一日も早く寒さに慣れることでした。経験したことのない寒さの中での訓練を、いつ来るか判らないアメリカ空軍機の来襲に備えての監視勤務でした。防寒服に身を包み寒さに震えながらの監視勤務は身にこたえました。

時折飛来する友軍機の整備点検をしながらの空の護りと、アメリカ空軍機や軍艦を撃滅してくれ

との願いを込めて整備給油しました。飛び立つ先は私共にはわかりませんでした。

南方方面では、連日米空軍機との航空戦が展開されているとの情報を耳にしておりましたので、実戦機には、整備兵は立派に整備して頑張つてとの願いを込めることしかありませんでした。

この頃北辺は静かでした。それでも五月にはアツツ島の山崎部隊が玉砕しておりますので、いつ米軍が北辺に來襲するか判りませんから、防備を怠ることは許されませんでした。

昭和十九年三月十日、上等兵に進級し、即日エトロフ島天寧飛行場に派遣されました。帯広から小樽港に列車で移動し、小樽港から輸送船でエトロフ島に上陸しました。

天寧飛行場には当時飛行機は一機もありませんでした。監視体制の一步前進でエトロフ島が北東部の最前線にあるからでしょう。この地で監視と、時折警備のため哨戒飛行する飛行機に整備と給油

することが私達の軍務でした。島は平和そのもので静かな島でした。

エトロフ島は大きな島で、港も三カ所あって、北の港が一番大きな港でした。小樽港からエトロフ島に来る時も、米軍の潜水艦を警戒して駆逐艦が二時間間隔で警備してくれました。幸い何事もなし、三日がかりでエトロフ島に上陸しました。

この天寧飛行場は海軍航空隊の基地でした。私達は海軍航空隊の飛行機の整備応援に派遣され、そして警備を兼ねるのが任務でした。

エトロフ島には陸軍の守備中隊が常駐しておりました。私達は守備中隊から徒歩二時間位かかる分遣隊に配属され、海岸近くの三角兵舎に寝泊まりすることになりました。

三月の北の島は寒く、ちよつとした穴を掘ろうとして鉄棒で大地に打ち込みますが、カンカンとはね返り、凍った土はなかなか掘ることができず、寒冷地の勤務は大変でした。上等兵に進級したものの初年兵上等兵で何から何まで上等兵が世話せ

ねばなりませんでした。

困ったのは洗濯用と入浴用の水でした。雨は少ないし大きな川がなく、チヨロチヨロ流れる小川で洗濯し、その水をバケツで運びドラム缶に移し風呂を沸かさねばなりませんでした。これも初年兵の上等兵のする仕事でした。

召集兵や若い現役兵は南の方に配属されるのでしようか、北の方には私達が最後でしようか、新しい入隊兵は終戦までありませんでした。

時折、北方海域の敵潜水艦を哨戒する九九式哨戒機が飛来し、その整備と給油作業がせめての仕事でした。南方作戦に航空機は飛び、ここは帯広航空隊と同じように飛行機らしい飛行機はおりませんでした。航空整備兵としての仕事はほとんどなく、敵機と敵潜水艦の監視をするのが仕事でした。水にも困りましたが、三角兵舎の湿気にも困りました。その上鳥のいたずらもありました。どこから見ているのか、そつと飛んで来て石等をくわえて飛び去るのです。

たまたま私の親知らずの歯が痛み出しましたので、当直下士官に連れられて守備中隊本部に来てみますと、兵隊は任務の合間に野生の秋田露を採って来て、皮をむいて乾燥させ、食用と紐に使用されているのには驚きました。私達は食事は航空兵食事でしたから不自由はありませんでした。

外出は全くなく、島の住民と接触することもありませんでしたから、島の人口がどれ位か、どんな生活をしているのかも知ることはできませんでしたが、ほとんどの人々が魚類、こんぶ、タラバガニ等の漁業者のようでした。

私は南方作戦の激しさを耳にしながら、北方では大きな事件もなく、空襲を受けることもなく冬を越し五月の春を迎えました。

がらんとした飛行場、飛行場はあっても飛行機はない。日本はどうなるのだろうかと不安になります。初年兵の私にはめったなことは口に出せず、雪解け後にあちらこちらに咲く花がいらいらする心を慰めてくれました。いつ来るとも判らないア

メリカの空軍機、アメリカの潜水艦や軍艦。不安な気持ちで監視任務に従事しました。

一兵士には詳しい情報はわからないままエトロフ島の天寧飛行場警備五カ月が過ぎ、八月十日、札幌丘珠飛行場へ転属を命ぜられました。エトロフ島から輸送船で小樽港へと向かいましたが、札幌丘珠飛行場にはある程度の飛行機がありましたので、これだけの飛行機があれば整備には大丈夫と思えました。ここでも私は初年兵で鍛えられました。

日曜日には外出も許可され、七月には東條内閣が総辞職されたこと、サイパン島の玉砕、満州方面へB 29が爆撃に行ったこと、九州方面が爆撃を受けた模様や戦況が厳しいことも少し分かりました。そして、兵舎の中では誰一人として口にはせず黙々として与えられた任務を遂行しました。

十月頃になって本土各地にB 24、B 29が爆撃を行っているとの情報を聴き、次は北海道だと、飛行機の整備に努力しました。

昭和二十年に入ってから、鹿児島県下の都市と空軍基地が爆撃を受けていることを聴く度に、父や母は元気でいるだろうかと少し心配になって来ました。

本土爆撃は九州、関西、関東と全国各地に広がっています。沖縄も危ないと地方の人が教えてくれました。五月になって二十数機の飛行機が沖縄に向かって丘珠空港を飛び立ちました。帽子を振って見送りながら「無事で帰還してくれ、決して死なないで下さい」と心の中で祈りました。

この頃から米軍の艦載機が、丘珠空港にも低空飛来し機銃掃射です。「それ避難」と近くの掩体壕めがけ逃げ込む。耳元をピュンピュンと機銃の弾丸の音、急ぎ友軍機が飛び立つが、既に敵機は飛び去った後、北海道で初めてのグラマンの空襲でしたが、空母が近くまで来ているのでしょうか。それからは度々飛来して爆弾を落して滑走路を破壊するので、急ぎ補修作業をと忙しくなりました。

六月二十六日、B 29 が初めて北海道を空襲しました。零戦が飛び立ってB 29 を迎撃しますが、高度が高く成果が挙がらなかったようでした。それでもいつ飛来してくるかわからない米空軍機に対し緊張が高まりました。こうして北の北海道もついに戦場になりました。

北海道の太平洋岸での米軍の艦砲射撃、機雷投下等が繰り返されると聴きました。七月十四日には、米機動部隊の艦載機数百機が函館、室蘭、釧路、帯広を空爆したと聴き、飛行機のいない帯広飛行場の被害はどうだったろうかと思いを馳せました。僅か三カ月でしたが冬將軍と闘いながら、飛行機のいない飛行場を守備してきた思い出が、頭の中を駆け巡りました。

五月に寄せ集めて二十数機が沖縄に飛び立つてから、役に立つ飛行機は丘珠飛行場にはほとんどおりませんでした。

給油する時は、満タンのドラム缶を高い所に押し上げて給油するので汗びっしりになりました

が、後には自動車のエンジンを利用して給油するようになりましたので助かりました。

口には出しませんが、こんな状況で戦争に勝つなんて思っている者は一人もいなかったと感じました。飛行機のいない飛行場で黙々と走り廻りました。

八月九日、ソ連が突如「宣戦布告」したとのニュースが伝わり「やはりか、日本は負けた」と直感しました。そしてアメリカとソ連の空軍機が来るぞと隊内は緊張しました。

八月十五日、重大な放送があるとの伝達でラジオの側に集まって聴きましたが、ガーガーの雑音で聞き取ることができませんでした。私の勤務する第二飛行場は、民家と隣接しておりましたので、ラジオ放送があつて二時間後には新聞の号外で終戦の詔勅が発布されたことを知りました。

予想はしておりましたが、号外の紙面に目を通しながら、涙が溢れ出しました。同年兵同志で「飛行機のいない飛行場ではなあ、勝つ筈ないじやな

いか」と悔しがりました。上官も先輩の古兵もがっかりされ、悲壮な顔で、それぞれ後片付けと整理が始まりました。

八月十五日付けで兵長に進級しましたが、少しも嬉しくはありませんでした。上等兵になつても兵長になつても初年兵は初年兵、威張る場所がない兵長でした。終戦になつても、兵器の後片付けや整理整頓には、すべて初年兵が怒鳴られて走り廻りました。

十八日には、アメリカ軍がさあーつと飛行機で飛んで来ました。流石に早い。上官との話し合いが始まり、私達は身の廻り品を持って近所のお寺に移動しました。この寺に兵役解除の十月三十一日まで待機させられました。その間残務整理として使役に使われましたが、敗残の心の傷跡は、私達の作業にも現れ、伍長殿から「足を踏ん張れ」と言うやいなやバチリと顔を殴られました。

「初年兵兵長、伍長殿に殴られて」と笑われま

したが、今も忘れることはできません。待機中に、エトロフ島にもソ連軍が上陸したとの情報を聞かされ、同島の日本人はどうなったかなあと心配になりました。飛行機のいない天寧飛行場での防備五カ月の平和な生活が懐かしく感じられました。

十月三十一日、兵役解除の命令を頂き、二年ぶりにやっと初年兵から開放されました。いざ帰るとなると、どの経路で帰郷しようかと上司に相談しましたら、東京は浮浪児に身の廻り品は盗まれるとのことで、札幌から函館へ、函館から青森へ、青森から日本海側を大阪へと三日がかりで、十一月三日故郷の吉松町に帰りました。

この十一月三日は明治節で町内の運動会をやっております。父も母も兄弟達も、元気で帰った私の姿を見て涙を流して喜んでくれました。父から友達の戦死したことを聴き、戦争の無情さに涙が溢れました。幸い私は内地勤務で、大陸や南方のような激戦地でなかったために、命も永らえ戦

争の苦しみも受けませんでした。飛行機のいない飛行場を転々と廻り、本業の航空機の整備に専念できなかったことの悔やしさを、立ちんぼうでの警備の苛立ちなど、あの苦しさを二度と経験してはならない、さらに大陸や南方、はたまた本土で何の罪もない人々まで悲惨な生活に追いやられ、苦しませた戦争は二度と繰り返してはならないと、仏壇の前で誓いました。

近所の方々や国鉄の職場でも、無事帰って来たことを喜んで下さり、職場復帰も数日で実現しました。戦死された方々の分まで頑張るぞと、遙か東の靖国神社に手を合わせ誓いました。

あれから六十年になろうとしております。ソ連に故郷を奪われ帰島できないエトロフ島の住民の皆様が、一日も早く日本の領土に復帰したエトロフ島にお帰りになることを心から願っております。

「北方四島は日本の国土です」と訴えながら。